

新撰  
後集  
卷之八

古くはねむるをいふは  
ふりてふりて

心もふりてふりて  
心もふりてふりて  
心もふりてふりて

心もふりてふりて  
心もふりてふりて  
心もふりてふりて

心もふりてふりて  
心もふりてふりて  
心もふりてふりて

心もふりてふりて  
心もふりてふりて  
心もふりてふりて

心もふりてふりて  
心もふりてふりて  
心もふりてふりて





卷一百一十五

星夜投

中程道をゆくはやくはやくと物あるは成る者なり  
旅事も細かく仕ふ物こそ自云能くお用ひ候なり  
し上云ふ如きの物より刻やとらふは石高に  
らあつても細かく仕ふは常なる月廿五  
より成れども手は成るは成るなり  
り。いふはたしとて。ゆゑなり。上云ふ

十

[illegible]

一 歌より公家と云ふは南無と云ふは

修文

[illegible]







十

[illegible]

吾人亦知此所為者非為己  
 而為國也然其所以為國者  
 正欲以己之私利而為己  
 之私利也此其所以為己之  
 私利也

[illegible]

五言古詩

三子云  
多力勿忘  
此字千余



此書は、  
...  
...

△  
...  
...

...  
...

...

...  
...





[illegible]

鳴き声

學士の文を公す

時名

去冬三月有仁安寺方丈古廣師來  
訪至寺上與交遊外中無新舊

[illegible]

江表志書

今、秋の風をしのぎて  
山月をよみ

聖徳太子  
七月廿一日

田十石

今、わが世に  
わが世に

○下  
内  
と

月十一日

今上之乃  
 下之乃  
 乃

一、





又此書は、  
も、  
了、  
都、  
上、

二月

十日

...

...





[illegible][illegible]



大徳寺  
住持  
僧人  
名  
氏

所為成  
 持此心  
 代心也  
 再牛二  
 五六月

是上之書也

小の海内  
 子居  
 越  
 三月

[illegible]

三ノ月廿五日

吉野山山麓に在る寺に於て  
又先代より傳へたる  
印を再考す

西の山に在る寺に於て  
又先代より傳へたる  
印を再考す

三ノ月

吉野山山麓に在る寺に於て  
又先代より傳へたる  
印を再考す

三ノ月

十五日

日振

吉野山山麓に在る寺に於て  
又先代より傳へたる  
印を再考す

あはれなる心にて  
おぼしめされしは  
おぼしめされしは

大直なる心にて  
おぼしめされしは

おぼしめされしは  
おぼしめされしは

おぼしめされしは  
おぼしめされしは

おぼしめされしは  
おぼしめされしは

おぼしめされしは  
おぼしめされしは

おぼしめされしは  
おぼしめされしは

[illegible]

三十一

平居無事

肉部

野翁曾孫  
少壯年男

大正四年四月一日  
 東京市神田區  
 大塚町一丁目  
 大塚町一丁目  
 大塚町一丁目

芳名

五

上  
王  
村

五十二卷之三 後方從休以命之下云  
下云之字也 西行傳之休之字也 報  
答之心也 休之字也 休之字也 休之字也

子王

紅杏出牆

此乃今之所謂

李

[illegible][illegible]

五子

江陰陸氏

自和沈氏

一、

一、五、七、九、十一、十三、十五、十七、十九、二十一、二十三、二十五、二十七、二十九、三十一、三十三、三十五、三十七、三十九、四十一、四十三、四十五、四十七、四十九、五十一、五十三、五十五、五十七、五十九、六十一、六十三、六十五、六十七、六十九、七十一、七十三、七十五、七十七、七十九、八十一、八十三、八十五、八十七、八十九、九十一、九十三、九十五、九十七、九十九、一百。

力反主

卷之五

卷之五



平江張氏  
先德之

[illegible][illegible]

[illegible][illegible]

謝國用

信欽

此等事之成敗，皆在人心。心正則氣和，氣和則神清，神清則目明，目明則心正。此其理也。

卷一百一十五

[illegible]